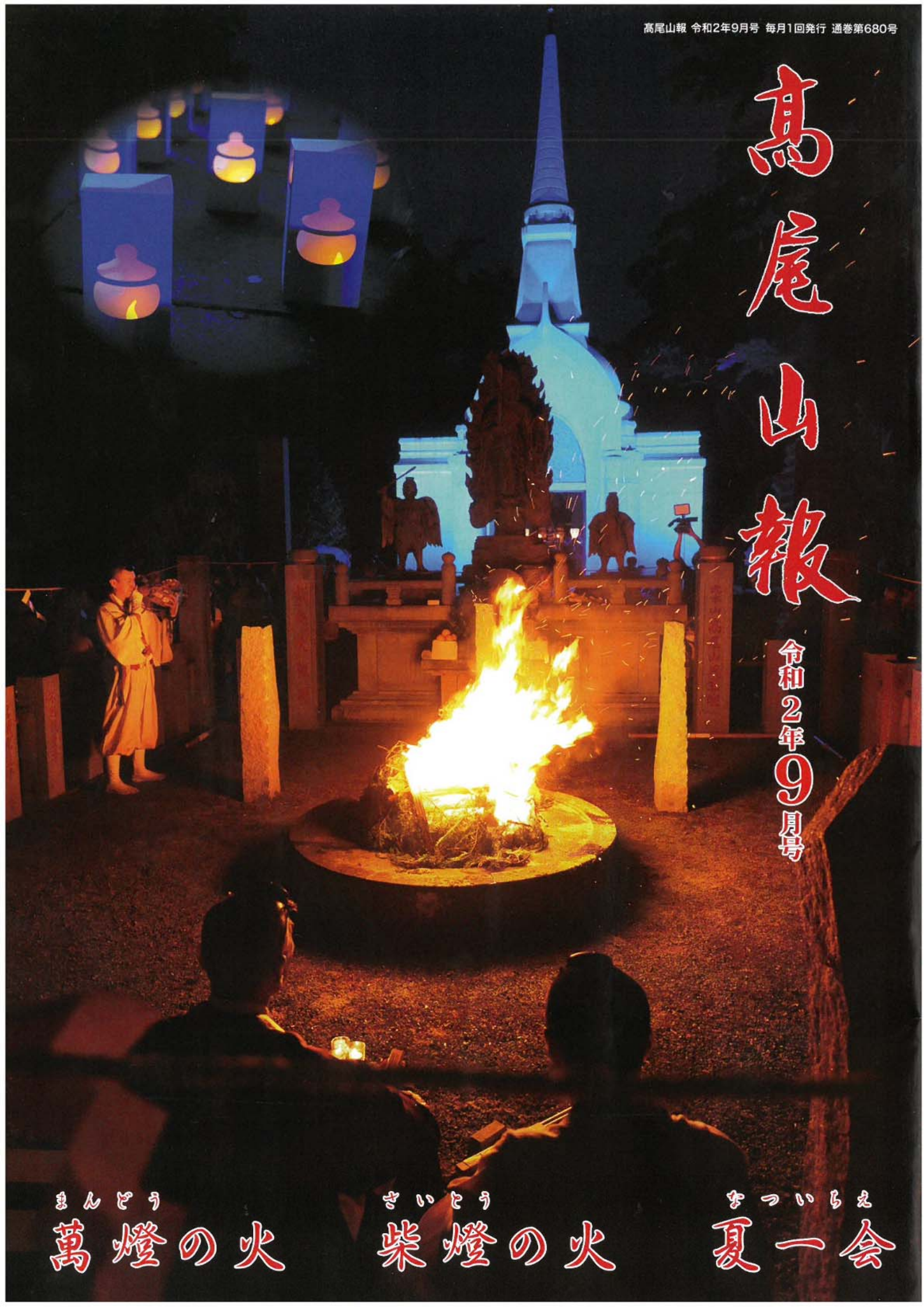
高尾山報 令和2年9月号 毎月1回発行 通巻第680号

高尾山報

令和2年9月号



萬燈の火（まんどう）　柴燈の火（さいとう）　夏一会（なついちえ）

法の水茎 (99)

大正大学講師　髙橋秀城

実るほど
頭を垂れる
稲穂かな

黄金色に染まった稲穂が、秋の日差しに輝きながら刈り取りの時を待っています。季節は待ちに待った秋の収穫期を迎えました。

九月の異名「長月」は、夜の時間が長くなる「夜長月」を略したものと言われます。昼夜が等しくなるお彼岸を過ぎれば、少しずつ秋の夜長を感じるようになるでしょう。九月は、夏から秋への変わり目でもあるとともに、昼と夜との境目の折節でもあります。日ごとに移りゆく自然に五感を研ぎ澄ませつつ、小さな秋を探してみるのも一興かもしれません。

秋はなほ
夕まぐれこそ
ただならね
荻の上風
荻の下露
（『義孝集』）

（秋は夕暮れ時が身にしみる。荻の上葉を吹き抜ける涼風や、萩におく玉のようにきらめく露の雫など、いっそう物寂しさを感じさせるよ）

秋は収穫の喜びを分かち合うときでもありますが、何とも言えない物悲しさを感じる折節でもあります。夕暮れ時に鳴く虫の音に囲まれれば、いつしか自分自身も涙もろい泣き虫になってしまうでしょうか。

太陽が真西に沈むお彼岸には、お墓参りをして、ご先祖様に手を合わせてみてはいかがでしょう。秋のお彼岸は、秋分の日を中日（彼岸の中日）とする前後三日間です。普段は遠くに感じられる、あの世とこの世が一直線に結ばれて、ご先祖様を敬う気持ちがいっそう深まる期間です。

先月号でも述べたように、仏教では、仏様が住まうあちらの世を「彼岸」、私たちが生きているこの世を「此岸」と言います。この両岸の間には大きな川が流れていて、向こう岸からやってくることはできても、こちらから向こう岸へ辿り着くのは容易なことではありません。

彼岸は、私たちにとっての「来世」でもあります。「来世」は「後世」「未来世」とも呼ばれ、過去世・現在世とともに「三世」の一つに数えられます。仏教語で未来の果てを「未来際」と言いますが、過去が人知を超えた久遠の昔から今に続いているように、未来もまた果てしない永久の彼方まで続いているのです。

とは言うものの、今生きている私たちの未来に目を向ければ、人の一生には限りがあるのが現実です。寿命が尽きた瞬間に「この世（現世）の未来」は終わりを告げるでしょう。ただ、それは果たして「あの世（来世）の未来」へと続いているのか……それは残念

物悲しさを感じるときもある秋の夕暮れ（写真撮影：髙岡輝幸）

折り折りの記 (133)

台湾の南端燈台含羞草

波多野　重雄

友人N君が旧制高雄中学校（台湾）最後の同窓会に私を誘った。昔から進学校として旧制日比谷中学校と双璧を競い、英才を輩出した名門校である。

先ず台南の女性の葵市長を紹介され、挨拶し、次に同級生代表に挨拶した。丁度、新幹線の測量真最中であった。

翌日、戦死者が多数南端の灯台岬を浮揚したと地元の人が教えてくれた。灯台への坂道にぎっしり含羞草が繁り、歩くと音を立て折れ伏した。含羞草の葉は羽状復葉で物が触れると羽柄から垂れ下がり、夜になると閉じ、傍を歩くと伏せる。日本には江戸末期に渡来、原産地はブラジルと言う。

（髙尾山健康登山の会会長）

祝日本遺産認定

八王子芸妓衆

清秀細腰揺香袖
舞扇供養粋洗練
歌舞歌舞復歌舞
仏道修行相不変

厚木市　荒井　一雄

血のにじむ
稽古稽古にまた稽古
修行僧らになんら変わらず

八王子芸妓衆

眉目秀麗なる細腰（やなぎごし）は
香る袖を揺るがす…
舞扇供養こそ洗練されたる
粋なるセンス…
歌舞（歌に舞踊）・歌舞に
復た歌舞の稽古…
仏道修行と相ひ変はらず…

ながら私には答えることができません。ただこの人生を、どのように歩むべきかを模索するばかりです。

鎌倉時代に生きた無住（一二二六～一三一二）という僧侶は、この世の生き方について、自らの人生を重ねながら次のように記しています。

（人は）過去を思い返し、未来に思いを馳せてばかりいて、今現在のことが全く見えていない。一瞬一瞬に滅びていくこの身を大切にして、一歩一歩短くなっていく命を守っている。

人間は慌ただしくしていて、死後の冥途が近づいていることも知らない。目の前にある夢のような儚いことばかりを営んで、来世のための誠の道（仏の道）の糧を積まないのは、冷静に考えてみると本当に悲しいことだ。

お金に困らないで羽振りを良くしているのもつまらないのに、それをうらやんで心穏やかでないという世間の常は、実に人間として生まれた甲斐が無いと思われるのだ。

出家前はこのような道理を思い知りながら、仏道を修めようとすることもなかったが、出家後は静かなゆとりの時間もあり、落ち着いた気持ちで月日を送っている。世間を離れずにいた昔を、今になって後悔している。

世の中は
思ひ乱れて
夏引の
厭はぬほどぞ
苦しかりける

（世の中は思いが乱れて、世を避け離れる前のことが、心苦しく感じられる）

（無住『沙石集』）

無住は、僧侶となる前の自分を冷静に見つめています。富貴を追い求め、日々慌ただしい生活を送っていたのでしょう。

「富貴にして苦あり、貧賤にして楽しみあり」という諺もありますが、仏の道を歩み、これまでとは違った視点を得たことによって、世の中の苦しみや楽しみは、必ずしも富貴や貧賤とは関わりが無いという境地に辿り着いたのではないでしょうか。

今日という一日も、未来には思い出となるのでしょう。それが「あの世（来世）の未来」だとしても、人間として「誠の道」を歩んだ良き思い出として懐かしむ日が来ればと思います。

現在の果を見て、過去・未来を知る。

（『熊野本地絵巻』）

（今の結果を見て、過去の原因や、未来の結果を思い知る）

人生の旅路にも、秋という季節はあるのでしょうか。日の前に広がる夕闇に迷い込まないよう、確かな灯を見つけ、力強く歩んでいきたいと念じます。

（栃木北部教区普濟寺）

医療従事者応援ライトアップ

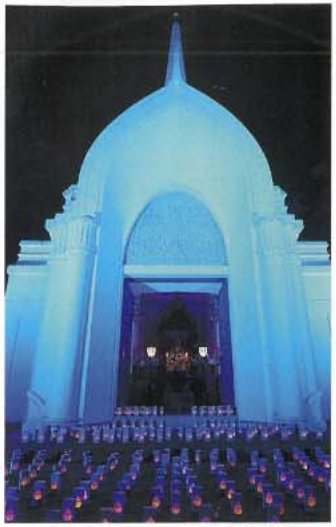
夕闇を照らす灯りの巡礼

本年は真夏の高尾山にて、「夏の高尾山＝清涼＝体感めぐり」が、八月三十一日まで実施され、山内各所への風鈴棚の設置や、夏そばキャンペーンが行われ、大勢の人々が涼を求めて高尾山を訪れました。

清涼体感巡りの一つとして、八月二十二日、二十三日には「灯りの巡礼」と称し、参道の春日燈籠に灯りが点され、有喜苑では全国の医療従事者に感謝の念を届けるため、仏舎利塔を青く照らし出す「ブルーライトアップ」が行われました。

二十二日には夕暮れ時の有喜苑において、柴燈大護摩供が厳修され、諸願成就を祈念し、また新型コロナウイルス問題が終息するよう、参列者と共に祈りを捧げました。

両日とも、有喜苑において全国の御信徒の皆様から御奉納頂きました、様々な願いが込められた紙燈籠の淡い光が、夕闇を彩っておりました。


青く照らされる仏舎利塔

奉納頂いた紙燈籠が並ぶ

夕闇照らす春日燈籠

紙燈籠で描いた医療従事者への想いを込めた「感謝」の文字

ウィズコロナの時代に

シャンソン歌手　友納あけみ

なかなか拭い去れない梅雨空…えっ！八月！もう夏なの？と、気づかされます。コロナ感染拡大の渦の中、季節も月日も曜日もすべて止まったよう…先の見えない重く暗い雲の中をトボトボと歩いている気分です。

皆様、お元気でお過ごしでしょうか？明日どうなるか？本当にわからない日々、一日、一日を元気に過ごして、今出来ることのベストを尽くしていくしかないかなぁーと…ユーチューブを開設したり、ライブもコロナ対策をできる限りやりながら、やっと何とか細々と動き始めています。

正直こんなに長引くとは思ってもなく、六月中頃までは、さまざまな対策を駆使すれば十月の開催は可能なのではと思っていました。その後、劇場でのクラスターの発生、そして感染者数の大幅な拡大と、次々にきて！毎日の報道に、いったいどう舵を切ったら良いのか？本当に迷っている日々です。

ただ、いつまで続くかわからない、コロナとの共生の時代、もう少し若い時なら二、三年は覚悟をして自分のブラッシュアップの時期と考えて篭る手もあると思うのですが、そんなに時の残されてはいない（笑）身としては、こんなことで、手をこまねいて今まで続けてきた活動を中断する気持ちにはなれず…ずっと私を支えてくれている、ミュージシャンや舞台スタッフの仲間達の苦境を見るにつけても、会場の入場制限などあらゆる手段で、安全を確保しつつし開催できるよう、東京都や文化庁の助成金を申請したり、ウィズコロナの時代に新しくオンラインやユーチューブ等を使ったら表現手段を組み入れたり出来ないかと？あれこれ、あれこれ模索中です。

八月中頃には、いろいろな形が少し見えてきますので、その都度、ご報告させて頂きます。ライブも、先ずは皆様の安全を第一に！新しい形をひとつづつ試していくつもりです。

写真提供　髙岡輝幸

第三十九回写経大会

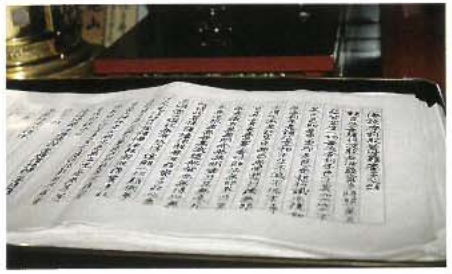
在宅写経納経式厳修

例年七月に開催されている高尾山写経大会は、本年は新型コロナウイルスによる、感染症拡大の影響により在宅参加にて実施し、二百五十名を超える方々が参加されました。

御本尊飯縄大権現様御縁日の八月二十一日には、皆様から郵送にてお送り頂きました般若心経の写経の納経式が、菅谷執事長御導師のもと厳修され、御本尊様御宝前に、お供え致しました。

納経式では、皆様の諸願成就と共に、一刻も早い新型コロナウイルス感染症の終息を、御祈念申し上げました。

納経者の諸願成就が祈念されました


御本尊様御宝前に奉安された写経

観音菩薩の宗教 ㉝

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

二十一ターラー菩薩を讃える経典（その8）

前回に続いて『二十一ターラーへの讃』の訳出と解説を行う。

(17.1)（汝に）帰依する。トゥレー。
足を踏みならし
(17.2)フームの形の種を蒔く
(17.3)メール、マンダラ、カイラーサ（の聖なる山々）
(17.4)（および）三世界（天・空・地）を震わす

（解説）サンスクリット語トゥレー（ture）は「疾き者」の意であるが、チベット語訳を含め、現代の英訳者のなかには「トゥレー」のまま音写していることが多い。拙訳では音写を選択した。トゥレーは先述のごとく（拙稿「観音菩薩の宗教㉜」）、ターラー菩薩のマントラ（真言）中の一語である。唐の訳家（翻訳家）の玄奘三蔵は、このように翻訳せず原語を音写すべき語を五種挙げ、それを「五種不翻」とした（景霄『四分律行事鈔簡正記』巻二、法雲『翻訳名義集』『翻訳名義序』）。ここではすべてを述べる紙幅がないが、玄奘は、インドにあって唐にないものや、漢訳すると意味が皮相になるなるものなどとともに、陀羅尼（dhāraṇī）のような「秘密語」を不翻にせよと規定した。現代言語学の術語でいえば、借用であり音写である。陀羅尼や真言（mantra）の不翻は漢訳仏典のみならず、チベット語仏典やモンゴル語仏典でも同様であった。先に見た（拙稿「観音菩薩の宗教②」）のサンスクリット語の真言「オーム・マニ・パドゥメー・フーム」がチベットでは「オン・マニ・ペメ・フン」、モンゴルでは「オン・マニ・パドゥマ・フン」となるのがそれである。これは漢訳仏典でも「唵引麼抳鉢訥銘二合吽引」（『大乗荘厳寶生経』）と音声記号を付しつつ音写される。漢訳『般若心経』の末尾の「ギャーテーギャーテーハラギャーテー」もしかりである。マントラを通じ行者と仏菩薩が一体化する已達の体験は凡夫に知り得ないが、凡夫とて恐怖をぬぐうときマントラを唱えて心が安らいだ経験を持つ人も少なくあるまい。その典型例が薬師如来の真言「おんころころせんだりまとうぎそわか」であろう。真言の唱えやすくして、深い宗教的意義はそこにある。

(17.2)の「フーム（hūṃ）」も同様である。(17.3)の「メール、マンダラ、カイラーサ」は、インドやチベットの高山。(17.4)ターラーが足を踏みならすとこれらの山々とともに三つの世界が震えるとする。

遷化後にダライ・ラマ一世の称号を与えられたゲンドゥンドゥプ（一三九一～一四七五）の注釈によれば、この二句は以下のように解釈される。「足を踏みならすことにより、フームの形を取った種より生まれたトゥレー、すなわち疾き者はメール、マンダラ、ヴィンドゥヤの山々と三つの世界を震えさせる」（Willson 前掲書、一五四頁）。

安蔵の漢訳は以下の通りである。「敬禮都哩巴帝母／足蹈相勢吽字種／彌嚕曼陀結棘薩／於此三處能搖動」。上述のごとく、ここでも ture、hūṃ は「都哩」、「吽」と音写されている。

Sの注釈においてこのターラーは「楽を成就するターラー（Tārā Sukha sādhanī / sgRol ma bDe ba sgrub ma）」と名付けられる。この名称に見える「楽（sukha）」は「極楽（sukhāvatī / bde ba can）」にある語で、心身の快楽な状態を指すが、それについては仏教諸派に多様な解釈がある。

その図像は、身体をオレンジ色とし、一面二臂、多くの宝石を身に付け、両手で胸の前に月の円盤を持つとされる。

Nの注釈では「限度なき征服（者）たるターラー（Tārā Apramēyākramaṇī / sgRol ma dPag med gnon ma）」と呼ばれている。

(18.1)（汝に）帰依する。
（汝は）神の湖の形（の）
(18.2)鹿の印のついた
（月に）安住する

(18.3)二度唱えるター
ラとパット（により）
(18.4)完膚なきまでに
毒を破壊する

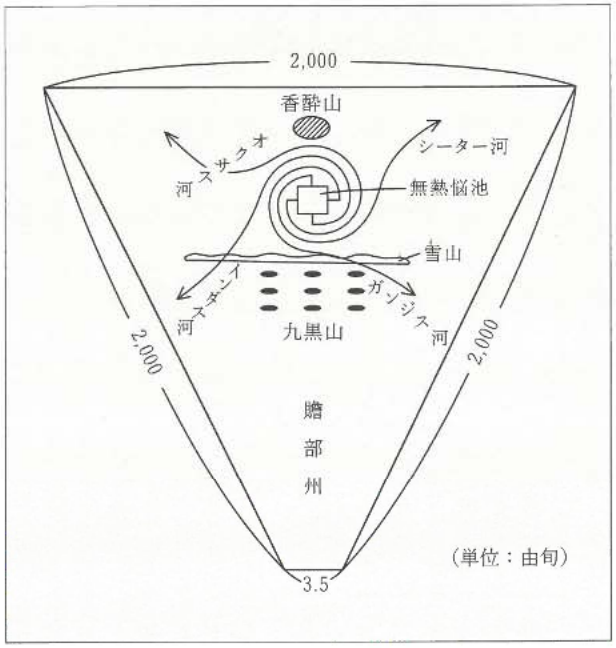
（解説）(18.1)「神」のサンスクリット原語はスラ（sura）で、仏教以前の『リグ・ヴェーダ』にも登場する善神で、仏教に受容された。以前記したように、アスラ（asura 阿修羅）は「神でないもの」を意味したが、のちに忿怒尊として信仰されるようになった（拙稿「観音菩薩の宗教㉒」）。ただしここでは具体的にいずれの神を指しているのかは未詳である。チベット語訳では、広く「神」「神々」に用いられるラ（lha）で訳されている。チベットの都のラ・サ（Lha sa）は「神（々）の地」の意である。また、「湖」についてウイルソンはカイラーサ山の麓のマーナサ・サローヴァラ湖（Mānasa-sarovara）を挙げている（前掲書一五六頁）。すなわち仏教神話上のアナヴァタプタ湖である（Anavatapta）。アナヴァタプタは「熱のない」を意味し「阿耨達池」と音写され、「無熱（悩）池」と漢訳される。阿弥陀信仰において極楽浄土にある湖もこれである（定方晟『須弥山と極楽―仏教の宇宙観―』講談社現代新書、一九七三年参照）。(18.2)「鹿の印のついた」はサンスクリット語でハリナーンカ・カラ（hariṇāṅka-kara）。インドにおいて月の標準的な呼び方であるため、ここでは月を補って和訳した。(18.3)「二度唱えるターラ」はターラー菩薩のマントラに二度のターラが含まれていることを指す。(18.4)毒はある解釈によれば、動物起源のもの（jaṃgama）と非動物起源のもの（sthāvara）に分けられ（ウイルソン前掲書、一五六頁）、また他の理解によれば内の毒と外の毒に分けられる（Khenchen Palden Sherab 他、前掲書一五八～一五九頁）。外の毒とはいわゆる毒物をいい、内の毒物は当初は効果的であるが後に副作用をもたらす薬物をいう。ターラーはいずれの毒物をも排除する功徳があるとされる。

安蔵の漢訳は以下の通りである。「敬禮薩囉天海母／手中執住神獸像／誦二怛囉作發聲／能滅諸毒盡無餘」

Sの注釈によれば、このターラーは「勝者の（白き）ターラー（Tārā [Sita] -Vijayā）／sgRol ma rNam par rGyal ma」と呼ばれる。その図像は、白い身体で一面四臂、白蓮の台座の正面には鵞鳥が坐すとされる。

Nの注釈によれば、「偉大なる孔雀のターラー（Tārā Mahāmāyūrī / sgRol ma rMa bya chen mo）」と名付けられる。その名の由来は、孔雀は毒を食して羽毛に変えると信ぜられているからである。

その身体は氷河を有する山の白色で、上述の月を有している。十音節のターラーのマントラを唱えながら身体から白い光線を発し、毒物を廃し、衆生の身体を清める功徳があるとされる。



神話・宗教上の無熱悩池は現実のインドの地理の反映とされる
（定方晟『須弥山と極楽―仏教の宇宙観―』より）

高尾山年代記 9

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

七世源智1―北条氏康の帰依

天文一〇年（一五四一）、父氏綱の死にともない、北条氏康が家督を継承した。この氏康こそは、高尾山が歴史の表舞台に登場するために、その背中を押した人物なのである。

北条氏康の戦い

北条氏はすでに伊豆・相模・武蔵南部と駿河（静岡県）の一部を勢力圏とする関東随一の大名に成長していた。本拠河越城（埼玉県川越市）から追い落とされた扇谷上杉氏は、松山城（同東松山市）に拠り反撃の機をうかがっていた。一方、西の方では今川義元が独断で甲斐（山梨県）の武田氏と同盟を結んだことから、早雲・氏親以来の盟約が破綻していた。

天文一四年（一五四五）の夏、今川勢は氏綱が甲駿同盟介入の際に占拠した上地を回復すべく、北条領へ侵入。氏康がこれを抑えに向かった間隙を衝いて、扇谷朝定は山内上杉憲政の加勢も受け、河越城を攻囲した。東西の危機に、氏康はやむなく駿河領を放棄して義元と停戦した。上杉勢は古河公方足利晴氏の後援も得て大軍を催していたが、翌年四月、氏康の攻撃を受けて敗北、朝定は討死し、ここに扇谷上杉氏は滅亡した。後世に川越の夜戦と伝えられる。

氏康は扇谷家旧臣の抵抗を排除しながら、上野国（群馬県）の山内上杉氏領に迫った。天文二一年（一五五二）、氏康は北関東へ出陣し、上野の諸豪族を次々に懐柔、追い詰められた上杉憲政は三国峠を越えて越後国（新潟県）へ落ちて行った。

北条氏と両上杉氏の戦いは武蔵東部・中部に展開したが、高尾山最寄りの西多摩の情勢はどうであっただろうか。かつて山内上杉氏の宿老であった大石氏は、比較的早く北条氏との抗争から身を引いていたようだ。永正七年（一五一〇）、伊勢宗瑞（北条早雲）に椚田城を攻撃されて由井城へ移った大石氏当主は、大永五年（一五二五）に「源左衛門入道道俊」という名乗りが見える。その以前に出家していたことがわかるが、出家は北条方への恭順と解釈する向きもある。道俊の子には憲重と天文一四年（一五四五）に綱周の名が見えるが、これは憲重が綱周と改名したものという見解がある。すなわち、偏諱から氏綱への服属を意味することになる。従来は天文一五年の川越の夜戦が大石氏降参の時期とされてきたが、その以前、永正一五年（一五一八）に北条氏の勢力が旧大石領の相模北部に及ぶ頃から段階的に服属度を強めていったようだ。そして、綱周は氏康の三男藤菊丸（後の氏照）を婿養子に迎える。その具体的な時期は不明だが、西多摩に北条氏の印判状が集中的に残る弘治三年（一五五七）を少しさかのぼる頃と推定されている。

七世源智の晋山

その時期、高尾山でも世代交代があった。天正期（一五七三～九二）の八世源實が九世源恵へ授与した印信（秘法伝授の証書）に添えられた血脈によると、六世慶尊の次には「源智法印」の名がある。この血脈からは住持交代の時期は不明だが、それについては、ともかく天保四年（一八三三）の「由緒書」にある慶尊の寂年弘治二年（一五五六）を充てることにする。既述の通り、初代俊源の伝説以外にはここまで歴代住持の晋山の具体的様相などは全く不明である。

その翌年の年次で、管見のところ、薬王院文書の中で最も古いリアルタイムの史料が伝来することになる。つまり、後世の記事ではなく、現用の文書として作成されたと判断される史料である。弘治三年十一月一五日付の七世源智から源恵に宛てた印信がそれである。後に高尾山九世を継ぐ源恵の一代前の源實への印信があってもよさそうなものだが、度々取り上げる天正の源實から源恵へ宛てた印信があるので、両人は共に源智に師事し、源實が兄弟子であったと考えられる。

つまり、源智は晋山の時期とされる翌年に伝法の儀式を執行する立場だったとすると、弘治三年の以前に相応の経歴を積んでいたことが推測され、また、印可を受ける弟子僧も複数人いた様相が知れる。弘治の印信には「武州多西郡此木田有喜寺道場において両部灌頂授けおわんぬ」という文言がある。僧侶に位階を授ける儀式である伝法灌頂をおこなう道場として在ったことがこの時点で明らかになるが、末寺の内相模原市域の寺院は室町中期の開山・中興を掲げている（江戸後期の地誌が典拠であるが）。末寺圏の形成期に関し、根拠として椚田長井氏の所領範囲を提示したように、室町中後期における地方本寺としての薬王院有喜寺像が浮かぶ。なお、薬王院の院号ではなく有喜寺という寺号の使用はこの時期の特徴である。

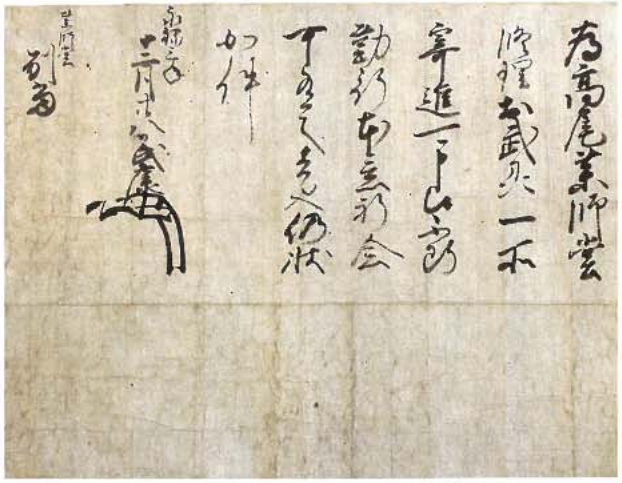
北条氏康の寄進状

弘治の印信に続いて薬王院文書に残るリアルタイムの史料は、永禄三年（一五六〇）十二月二八日付の「氏康」と署名のある判物である（写真）。判物とは差出人の花押を付した文書のことで、その本人の意志を直々に伝達する意味で重要性の高い文書となる。その文面を見てみよう。

高尾薬師堂修理のため、武州において一所寄進申すべくそうろう、断えず勤行、本意祈念これ有るべきものなり、よって状件の如し
永禄三年
十二月二十八日
氏康（花押）
薬師堂
別当

断片的ながら、ここに当時の高尾山の様子を垣間見ることができる。堂に祀られた薬師如来は行基開山以来の本尊とされ、現在も秘仏として祭祀されているが、この時点で祭祀の中心として（北条氏からは）認識されていたことがわかる。

「別当」とは長官、すなわち最高の統率者の意味で、人格を示すものなので薬王院有喜寺の住職、源智のことになる。江戸期以前において院号・寺号は住職自身の人格を指す意味で用いられる傾向にあり、一山の中心となる神祠・仏堂は必ずしも別当の院号・寺号で呼ばれるとは限らない。すなわち、神祠・仏堂に付属する寺院（塔頭）は複数あって各々が寺号を持ち、その中の最高位にある者が「別当」ということである。高尾山の場合、とりあえず、薬王院有喜寺以外に寺号を名乗る塔頭は確認されていない。



北条氏康による寺領寄進の判物
写真提供：八王子市郷土資料館

文面は、具体的な場所は示されていないが、武蔵国の内に収益を薬師堂修復費用に充てる土地を寄進するとし、その理由として「本意祈念」とある。氏康にとっての「本意祈念」とは何であったのか？　明確に表現されていないが、この時、北関東では重大な事態が進行しつつあった。

時は永禄三年。戦国の動乱の只中である。武田信玄の軍勢は信濃（長野県）北部に達し、西国では毛利元就が石見国（島根県西部）をめぐって尼子晴久と抗争を繰り広げ、大友宗麟が北部九州を制圧していた。この年の五月一九日には織田信長が桶狭間の合戦で今川義元を破っている。高尾山は戦国大名北条氏との関わりによって、深い霧の彼方から日本史の表舞台へとその姿を現したのである。

《参考文献》黒田基樹編『論集戦国大名と国衆1武蔵大石氏』（岩田書院、二〇一〇）、黒田基樹『戦国北条五代』（星海社新書・二〇一九）

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

最大の運の良さ

八王子市　澤田　守正

現在、将棋界では史上最年少で二冠を達成した、藤井聡太八段の活躍が期待されているが、昭和の囲碁界に君臨し、名前を知らない人はいないという、昭和の棋聖、碁の神様と言われた呉清源九段がいた。

呉は平成二十六年十一月三十日に、天寿をまっとうして百歳を以って、ご逝去されたが、この天才棋士は数多くの名言を残している。

江戸末期の囲碁棋士、幻庵因碩（一七九八～一八五九）が『碁は運の芸なり』と言ったように、勝ちとか負けとか言うのは、単なる名前であり、全身全霊を対局に注いだことに価値があるのです。

＊＊＊＊＊

弱々しく、悩みが尽きず危険な目にもあった私が、長生きできているのはなぜか、とよく問われます。「お守り」があったからとしか思いようがない。宇宙は生あるものに次々と試練を課す。我々はその試練に対し、人事を尽くして天命を待つことしかできません。

中庸に
天命これ性
性に率うは
これ道

（天はすべての人に、それぞれの個性を与え、その個性を伸ばしていくのが、人の生きる道）

漫然と人生を、おくるのはつまらない。

人生の意義を自覚し、それぞれの才能を生かして、世の中の役に立つよう修行を積むことが、肝要と思います。

平成十六年十二月十八日
朝日新聞のコラム

この言葉は、苦労し、鍛錬し、自らの道を悟られた人の言葉である。

この域に達することは、凡人である自分には到底無理な事と分かっているが、呉清源でさえ最後の最後は、その人が持っている「天命」即ち「運」が、人生を決めると言っている。

『碁は運の芸なり』は、囲碁のみならず、「人生も運の芸なり」ということである。

勿論、何の努力もせずに、唯、運にのみに身をゆだねることでは無く、自らが努力し、呻吟（苦しみあえぐこと）して運命と対局した結果に於いては、運に任せるしかない域に達するのであろう。

人との出会いも「運」を左右する一つの要因であるが、それも大きな要因であることに間違いはない。

その人と繋がったばっかりに、「運」を得て上り詰めた人、その人と繋がったばかりに、「運」に恵まれず失意の道を歩んだ人。本当に人生色々である。

しかし、ここで大切なことは、「運」は「天運」として受け入れ、

風車
風の吹くまで
昼寝かな
廣田　弘毅

という様な気持ちを持った方が、人生を楽しむ生き方であろう。

私を振り返ると、運があった様な、無かった様にも思える。徹底的に運を引き込む努力をしたのかと、心の中を問い詰めると、

『お前の、これまでの努力は、たったそんなものなのか』との声が聞こえて来る。

反省はあるが、昔を今には引き戻せないのであれば、「俺の運なんてこんなもんさ」と開き直るしかない。

この齢まで生きて来られた事こそ、**《最大の運の良さ》**と思い、「昔は昔、今は今」とすっぱり割り切って、残された人生を如何に楽しむか、何が出来るかを考えて、生きることこそが、一番大切なのではとの思いに至っている。

命は天運にまかせて惜しまず、いとはず。
身をば浮雲になずらへて、頼まず、まだしとせず。

鴨長明「方丈記」より
合　掌

一福延寿

小さな幸せに感謝を捧げ　充実した人生を送る

大山御黄首揮毫

おはなし散歩道

オニヤンマ

柏市　木村　研

夏休み、じんくんは、自由研究を昆虫採集にきめた。

「だから、アミ買って」

昼ご飯の後、お母さんにお願いすると、

「一年生には、無理だね」

と、横からお兄ちゃんがいった。

「そうよ。お兄ちゃんにお願いしなさい」

おかあさんは、そういうと、さっさとお使いにいってしまった。

じんくんは、おもしろくない。だって、お兄ちゃんと虫取りにいくと、虫かごしか持たせてもらえないからだ。

「自分でつかまえるよ」

と口をとがらせていると、

「おじいちゃんのアミじゃだめかい？」

と、おばあちゃんが奥の部屋からからアミを持って出てきた。

布の白いアミだった。

「おじいちゃんは先生だったから、学校が休みになると、いつもこのアミを持ってトンボを追いかけていたわね」

と、懐かしそうにいった。

そういえば、おばあちゃんの部屋に飾られている写真のおじいちゃんは、麦わら帽子をかぶって、白いアミを持って、にこにこ笑っていた……。

でも、そんなことはおかまいなしだ。じんくんは、アミをかついで飛びだしていった。

住宅地のはずれの公園まで行ってみると、セミがたくさん鳴いていた。

でも、セミは、じんくんが近づくと、すぐに逃げてしまう。

じんくんは、おじいちゃんの写真の横にあった標本箱を思いだした。

その中に、大きなトンボがいた。

「ぼく、セミなんかいらないよ。トンボがいいや」

じんくんは、トンボをさがして水飲み場の近くまでいった。すると、と目の前にトンボがいた。

「オ、オニヤンマだ」

じんくんは、息を飲んだ。動けない。オニヤンマとのにらめっこが始まった。

それなのに、オニヤンマは、平気でじんくんの横をすり抜けていった。

「ちぇっ。トンボもバカにしてるのか」

じんくんは、アミをたたきつけた。

「どうした。もうあきらめたのかね」

麦わら帽子をかぶったおじさんが、にこにこ笑って立っていた。

「ここで待っていれば、オニヤンマは何度だってもどってくるよ……」

○○○○○

「ヤンマだよ。ヤンマ」

じんくんが両手でアミを押さえて帰ってくると、お兄ちゃんが面倒くさそうに階段を下りてきた。

「す、すげぇ」

お兄ちゃんが目を丸くした。

「ほら、オニヤンマ」

じんくんがアミをあけると、パッとオニヤンマが逃げた。

「あっ」

「窓だ。窓を閉めろ」

と、お兄ちゃんがいった。

じんくんが、大急ぎで窓を閉めると、オニヤンマは玄関に逃げていった。

「ただいま」

そんなこととは知らないお母さんは、大きな荷物をかかえて、のんきに帰ってきた。

オニヤンマは、お母さんの横をすりぬけて悠々と外に逃げていった。

「おしかったなあ」

お兄ちゃんが、じんくんの肩をポンポンとたたいた。

「大丈夫。オニヤンマは、何度ももどってくるんだって」

じんくんは、Vサインを作って、にっと笑った。

（おわり）

（挿し絵・小出　茂）

お護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。

お護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊様に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

苗木奉納

古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納するという習慣がありました。今日でも、お杉苗奉納は続いており、参道の大杉原には一年間掲示される杉苗奉納者の芳名板が、板塀のように並んでおります。

高尾山では寺法において「殺生禁断」を第一義に、むやみに草木を切ることを厳しく戒めてきました。私達は信仰心と共に大自然から守られつつ、共存共栄し、本日の景観を造りあげてきたということを、忘れてはならないと思います。

尚、毎年**十二月十日**までに、**一万円以上**を御奉納頂いた方のお名前を、翌年より掲示させて頂いております。

高尾山のお護摩札とお供物

(大) 10,000円	お護摩 3,000円以上	お護摩 5,000円以上	お護摩 10,000円以上	特別大護摩 30,000円以上	開帳大護摩 50,000円以上	特別開帳大護摩 100,000円以上
(中) 5,000円						
(小) 3,000円						

家内安全(家)
商業繁栄(商)
事業繁栄(事)
交通安全 車内用札(車+交)
交通安全 神棚用札(木+交)
身上安全(身)
災難消除(災)
厄除(厄)
身体健全(体)
当病平愈(病)
開運(開)
良縁成就(縁)
安産成就(安)
入学成就(入)
心願成就(心)
御礼(礼)
奉納杉苗(杉)

（　）内の略字をお書き下さい

お護摩の願事

お願い事は一体一願意とします。併願（二願意）は一万円より受け賜ります。但し、五千円で家内安全と商売繁昌のみ併願とさせて頂きます。お護摩札には年令・生年月日等は入りません。

いけばなの心⑦

華道教授　佐藤　宗明

九月に入りますが、まだまだ暑い日が続き、秋の空気が恋しくなります。今回はそんな秋を待ち望む気持ちを表現しようと思い制作しました。今回の作品は生花新風体という花型にしました。三種の花材を使い、型にとらわれずに植物の生命感を表現しようというものです。

今回は大きく口の広い鉢形の器を使いました。花材のイタヤカエデの葉を思い切って省略して扱うことで、動きや風を表現し、秋の訪れを感じて頂くように配置しています。さらにフトイを高く扱うことで、伸びやかさと涼しい水辺の雰囲気を表現しています。

仕上げに足元へ竜胆を短くあしらう事で、作品の伸びやかさと色合いによりを強調し、秋の雰囲気を演出しています。

夏から秋へ、季節の移ろいをいけばなで表現してみました。

ごく少ない花材で季節感、植物の生命感を表現できるのはいけばなの特権だと思います。今月後半には秋分をむかえ、道端の植物を見ても秋の訪れを感じる事ができると思います。

是非、身近な秋を見つけてみてください。

花材：イタヤカエデ、フトイ、リンドウ

郵送御護摩申し込み受付について

当山では、御護摩修行に参加できない方の為に、御護摩札の郵送をお受けしております。

手紙、FAX等でお申し込みをお願いしておりますが、新型コロナウイルスによる感染症流行の影響により、多くの御信徒の方々から郵送御護摩のお問い合わせを頂いている現状を鑑み、高尾山報本号に同封致しました郵便振替「払込取扱票」を利用して、お申込みいただけますよう便宜を取り計らいましたので、宜しくお願いいたします。

尚、元旦御護摩等、お正月以降の御護摩申込をご希望の方は、中込方法が異なりますので、お手数ですがご連絡願います。

七五三身上安全祈願

「七五三」とは、皆様方の可愛いお子様が、これから健康にすくすく育ちます様に、又、交通事故などに遭わないように、との願いを込めて寺社にお参りするという行事です。

高尾山でも御本尊・飯縄大権現様の御加護を願い、毎年多くのお子様がお参りに訪れております。十月～十一月の間、山上「御護摩受付所」にて、「七五三祝い子育て祈祷」を受け付けております。

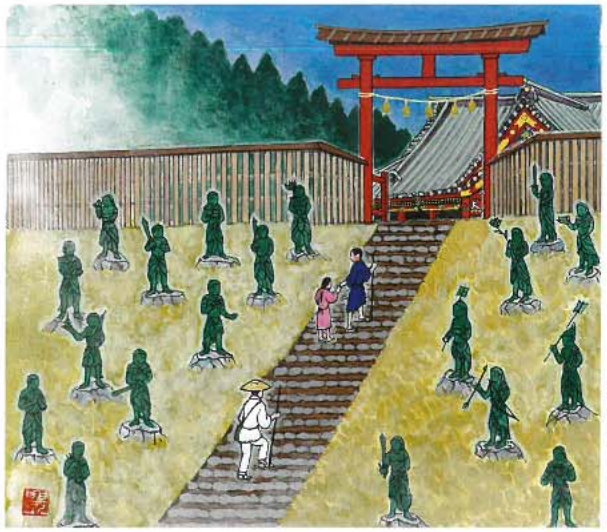
どうぞ皆様で御来山なされますよう、ご案内申し上げます。

※十一月中の土・日・祝日には大変な混雑が予想されますので、時間に余裕を持って早めの御来山をお勧めしております。

高尾(たかお)の物語(ものがたり) 29

三十六童子像建立

絵・橋本豊治



三十六童子

三十六童子とは、不動明王を助ける眷属(けんぞく)(従者)です。三十六童子の名を唱えれば悪鬼退け、信仰する者を守護して、長寿をもたらすとされております。

明治期には、明治三十四年の大本堂落成をはじめとして、積極的に山内整備が進められました。

その一つに大本堂から飯縄権現堂(御本社)へと至る途中の踊り場には、あたかも飯縄権現堂を守るかのように、青銅製の三十六童子像が立ち並んでおります。

この一群の像は明治四十年の飯縄権現堂修繕と共に勧進が行われ、二年後の明治四十二年に建立されました。

童子たちの表情、仕草はそれぞれ異なっており、愛らしさや力強さに満ちていて、手を合わせるだけでも仏様の功徳が感じられることでしょう。

建立以来、わが子の健やかな成長と長寿の御利益を願って一心に祈る人々の姿は、今も昔も絶えることはありません。

規則守れば
心は荒れぬ
歩みゆきます
人の道

奉納御礼 浅間社手すり完成法要厳修

八月二十一日、高尾山浅間社の階段に新たに手すりが奉納され、佐藤執事御導師のもと完成法要が厳修されました。

今回御奉納頂きましたのは、八王子市にお住まいの小池まり子様（写真前列左）です。小池様は長年に渡って信仰を続けられており、現在でも月参りを行っております。

お参りの際には、毎回浅間社に行かれており、浅間社の階段には手すりが無いことから発願(ほつがん)され、今回御奉納頂く運びとなりました。

小池様におかれましては、重ねて御礼を申し上げます。

手すりの前で佐藤執事と記念撮影（前列左小池様）

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「秋桜とともに」

八王子市 栃谷玲子 様

高尾山 季節散歩

暦の言葉

「七十二候」

玄鳥去

「つばめさる」

九月十七日～九月二十一日頃

春に日本にやって来たツバメが子育てを終え、越冬のため東南アジアやオーストラリア等の暖かい南の地へと旅立つ時期の事です。

高尾山にも、例年春になるとツバメがやって来て子育てをしています。来年の春まで暫(しば)しの別れです。

今月の風物詩

赤とんぼ

童謡にも歌われているように、おなじみの秋の風物詩です。「赤とんぼ」と呼ばれておりますが、アキアカネ等のアカネ属のトンボの総称です。

こうした赤とんぼは夏にも山地で見られますが、夏の時期には橙色で、秋が深まるにつれて見慣れた赤色に変化していきます。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

九十二段　心の声を言葉にして声を出す

以心伝心という言葉があります。口に出さずとも、相互の意志が通じ合える状態のことです。確かに素晴らしいことですが、相手のことをよく知らない時などには、自分の考えを口にだしてハッキリ言うことも必要です。

院内散歩 43

～薬王院の展示物～

版画「天竜」　作・秋山巌

高尾山報助成金志納者御芳名（順不同・敬称略）

板橋区　一般社団法人全国人権擁護協議会
〃　一般社団法人全国人権擁護協議会
〃　会員一同
〃　(株)宍戸工務店　宍戸　操
大垣市　(株)植倉造園
足立区　小関　佳子
八王子市　小池　まり子
〃　成川　美保
〃　石井　雅子
南埼玉郡　春山　武男
町田市　市野　貴之
新座市　彰山　粧麗
杉並区　大崎　トシ子
陸奥岡田市　金　剛寺
北　区　鈴木　あい子
八王子市　遠藤　静雄
比企郡　戸田　朋幸
相模原市　中里　暉久江
新座市　髙橋　久子
小平市　池田　順子
高尾山健康登山者一同

登山だより

■十月行事日程■

一日～七日
聖天秘供(聖天堂)

五日、十七日、二十九日
弁天様御縁日

四日
中興俊源大徳忌

八日
仏舎利塔詣り(仏舎利塔)

五日、二十七日
御詠歌勉強会(十時山麓不動院)

十七日
高尾山秋季大祭
※秋季大祭につきましては、新しい生活様式に即した内容にて実施を予定しており、詳細を検討しております。

二十四日
月例写経会
(十三時山麓不動院)

二十五日
高尾山とんとんむかし「語り部の会」
(十二時半山麓不動院)

二十八日
奥之院開扉供養
(十時奥之院)

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
(九時大本堂)
○御本尊様の日々の御加護に感謝し、百味のご供物を捧げて供養する法要です。
皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。
御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間
(4月15日～10月31日まで)

午前5時30分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

高尾山の昆虫

ミヤマアカネ

131

ミヤマアカネはトンボ科アカネ属いわゆる赤トンボの一種で、漢字では(深山茜)となります。
深山と言っても実際は高地から低山地にかけて広範囲に分布し、同じミヤマが付くミヤマクワガタ同様に高尾でよく見られる種として親しまれています。
赤トンボは童謡にもなっている身近なトンボで、日本では十六種くらいの仲間が生息していますが慣れないと見分けは難しいかも知れません。
その中でミヤマアカネはやや小型の種ですが、最美の赤トンボという呼び声があるようにとても鮮やかな色彩をしています。
本種は四つの翅すべての先端より少し手前に褐色の帯状紋があることが特徴的で、他種とも違いが明瞭です。
六～十一月という長い出現期の中では色彩が変異し、未熟な頃は薄かった体の色も成熟すると深紅に近い色に変わります。
場所によっては減少の声が聞かれますが、高尾ではその美しい姿はまだまだ健在であり、訪れる秋の中で私たちの目を楽しませてくれるでしょう

(文 松島　孝　撮影 上村　雅昭)

◆訂正とお詫び

先月号「健康登山百冊満行に百人を超す」中の四ページの第三段十九行目にあります、「今野博雅」を「今野博雄」と訂正させて頂きます。
茲に謹んでお詫び申し上げます。

◆お知らせ

高尾山では、新型コロナウイルスの感染予防の為、受付や御札授与所への飛沫感染防止ビニールガードの設置、境内各所への消毒液設置、また職員のマスク着用などの対策を実施しております。
御来山の皆様におかれましても、手洗いやマスク着用等の予防対策に十分留意されますようお願いしております。

高尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 菅谷秀文
編集人 渋谷秀芳
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円